

なぜ英語が話せないの

<2>

紙の早版を真っ先に買いに出掛けるのは、いつも日本人記者である。
特派員がこの状態だから、国

世界の政治、経済、軍事の「中枢神経」が集中するワシントン。この「国際舞」台で日夜、ビッグニュースを造る日本の新聞、テレビの記者は五十人近くにもぼる。わが国の海外特派員は、三十七カ国に合計約二百三十人が派遣されており、五分の一弱が米国の首都に駐在している計算だ（日本新聞協会調べ）。

エリートも幼児並み

実用会話を軽く見るな

コレスポンデント（特派員）と呼ばれる彼らは、ホワイトハウス、國務省、ペンタゴン（国防総省）などの記者会見に出席。記事を書いて本社に打電する。レーガン大統領らの新政策の説明を瞬時に理解して、手際味がわからず「米国人と簡単な

が、実情はちよつと違う。大ざっぱに言って、記者会見の内容を九割以上理解できるのは一人か二人、例外組である。「何か重大ニュースを落とす」と夜十一時ごろ、大抵は六割前後の語学力しかない。中には二、三割しか意人通りもない犯罪都市で、翌日「何がおかしいのか」と意味をつかめない父親、

（特派員）が尋ねる、逆転現象も珍しくない。特派員がこの状態だから、国内にいる記者は想像がつこうと、いうもの。十五年ほど前、長崎港で停泊中のパナマ船でガスが数回にわたって爆発、乗組員六人が死傷した。さっそく事件記者が取材したが、だれ一人英語

このる異国の「奇妙な発音」に遭遇すると、自信喪失に陥る。その点、現地の小、中学校に通う彼らの子供は英語の上達が早い。テレビ番組を見てクスクスと擬音を出した。船長は首を横に振った。そこで今度は「ボンを、ボン」と二度。そして「ボ

で「ガス爆発は何度起きたのか」と質問できない。仕方なく長老格の記者が、にぎったこぶしをパツと開きながら「ボン」九割が大学に進学する。そして、六年間あるいは十年と英語を勉強した結果が、このありさまである。

アラン・ブース氏の「日の丸英語に物申す」



英語教育の在り方に書櫃を鳴らしたアラン・ブース氏の「日の丸英語に物申す」

ン、ボン、ボン」と、繰り返したとき、相手は「そうだ」と答えた。翌朝の紙面には「ガス爆発は三度起こり……」とこともなげに掲載された。記者たちは軽視の英語教育の在り方に警鐘を鳴らすため「日の丸英語に物申す」を書いた。そのブースさんが、こう言っている。「日本人はユネスコ主催の数学テストでは世界一ですが、英会話に関しては限り、失礼ながらエリートと言われる人も幼児並みです」。